



紙の上のこぼれ 伊藤たかみ

芥川賞を受賞したとき、某文学館から受賞作の自筆原稿を寄贈してもらえないかと頼まれた。しかし、デビュー時からワープロとパソコンで執筆してきた僕には、いわゆる自筆原稿というものがまったく存在しない。そこで、すでに活字となっていた受賞作の冒頭一ページを、原稿用紙に写して渡すことになった。どうにも皮肉な話だが、最近の作家には大抵そうしてもらっているとのことだ。

確かに原稿用紙は、パソコン世代の作家にとっては遠い存在になった。使いこなせないのもわかっている。紙の上で文章を練り上げてゆく作業をしたことがないし、推敲のたびに丸ごと書き直すものなの。つけたしだらけの状態でも渡してもいいの見当がつかない。もっとも原稿用紙への憧れだけはあって、芥川龍之

介の愛用した「松屋」のものや、漱石の「相馬屋」のものなど、どこかで読むたびにいいなあと思ってしまう。余白を増やしたり、罫線に好みの色を選んだ特注品も羨ましい。使えなくてもいいから、一度くらい作ってみたいものだ。

一方、パソコンで執筆をする身としては、印刷用紙にそれほどこだわらない。原稿用紙を選ぶという行為は、どんなエディタソフトを選び、機能を設定するかという味気ない作業に取って代わった。ちなみに僕の場合はモニター上で縦書きにして書いている。横書きの方が操作しやすいのはわかっているものの、縦組みのゲラになった段階で文章の与える印象が違ってしまつて嫌なのだ。ウィンドウに余計なバーは表示させない。罫線も同様で、四十字×二十行のA4書式いわばこれが僕の原稿用紙ということになるが、書き出してみるとやはり味気ないものだ。

しかし、こだわらがないというだけで、紙の使用量は決して少なくない。小説にせよコラムにせよ、最低でも二、三度はプリントアウトするので、締め切り間際には部屋じゅう紙だらけになる。A4のコピー用紙は両面印刷（片面ではもったいない）され、赤を入れられ、床にはばら



伊藤たかみ(いとう たかみ) 1971年、兵庫県生まれ。95年早稲田大学政経学部在学中に、『助手席にて、グルグルダンスを踊って』で第32回文藝賞を受賞しデビュー。00年『ミカ!』で第49回小学館児童出版文化賞、06年『さぶろん』で第21回坪田謙治文学賞、『八月の路上に捨てる』で第135回芥川賞を受賞する。

高円寺・古本酒場コクテイルにて

まかれたり、クリップで吊されたりしている。掃除が面倒なのはわかっているが、推敲の際はこうして印刷したものでないといけないうのだ。
文章というやっかいなやつは、同じものであっても、モニター上と紙の上では異なる顔を見せる。偉そうなことを言つと、紙の上ならではの正しいリズム、正しい句読点のようなものがあるように思える。これにより余計な部分や足りない部分も見えてくる。文章を紙の上でふるいにかけるようなものだが、果たしてなぜこのような違いが生じるのかは今もってわからない。紙とモニターでは読む速度が違ってくるのだろうか。紙の手触りや質感が、目に見えない別の効果をもたらしているせいだろうか。
いくらパソコンで執筆していても、作品の大半は紙に印刷されて世に出る。そうした意味でも、これは看過できない問題なのである。

PAPER Q & A Vol.11

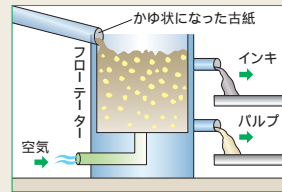
Q. 印刷されたインキは、どうやって取り除くのですか?

A. インキを泡に取り込み、除去します。

再生紙をつくるには、まず巨大なミキサー状の機械で古紙をおかゆ状にほぐします。そのあと異物やゴミを取り除き、フローテーターで脱墨処理をします(図)。ここで下から細かい空気の泡を吹き込み、上昇する気泡にインキを吸着させて水面で取り除きます。繊維は親水性なので下に沈み、インキと分けられます。得られたパルプは、除塵・洗浄・漂白され、再生紙の原料になります。高水準の技術により、脱墨

したパルプの品質が向上したため、様々な紙に利用されるようになりました。

古紙に残ったインキを取る



今回は4月5日号、山本容子さんです。